

高齢者の自宅退院時における健康及び日常生活上の問題

中西代志子 高田節子 近藤益子 太田にわ 猪下 光 池田敏子 小島操子¹⁾

要 約

高齢者の退院指導及び在宅看護の在り方を検討した研究は少ない。そこで、高齢者の自宅退院時に持つ健康上及び生活上の問題を明らかにすることを目的に、面接調査を行なった。対象は、中・四国の3国立大学付属病院と1総合病院で退院許可のあった70歳以上の患者78名とした。調査内容は、退院時の患者の身体状態・日常生活動作・退院時の患者の状況・家族の状況・健康に対する意識や取り組みについてとした。その結果、(1)高齢の自宅退院患者の23.1%は、身体状態上継続看護が必要であった。(2)退院患者の20.5%が、退院後生活を自立する為に介助が必要であるとしていた。(3)退院患者の57.7%は心配事を持ち、50%は相談・指導を希望していた。(4)患者の世話人の42.3%は職業を持ち、27.3%は健康を害していた。(5)退院患者の73.1%は何らかの健康管理がなされ、84.7%は生きがいを持っていた。

キーワード：高齢者、継続看護・生活の自立、退院時指導、在宅看護

はじめに

近年、わが国においても高齢化が進み、疾病を持つ高齢者が多くなった。高齢者が健康障害により入院すると、身体的、精神的変化に加え、環境の変化からそれまで維持してきた生活・健康上に様々な問題を生じる。それらの問題は、退院後自宅療養を継続する上で高齢者にとっては予想外のことも多く、生活意欲の低下にもつながると思われる。継続看護・在宅看護が重要視されつつある現在、医療施設から家庭・地域へ帰っていく高齢者がどのような問題を持ち、また、どのように解決しているかを明らかにすることが重要であると考える。

そこで、高齢入院患者の退院指導及び在宅看護の在り方を検討する上での基礎資料を得るために、高齢者の自宅退院時における健康上及び日常生活上の問題を明らかにすることを目的として調査を行った。

研究 方法

1. 対象：中・四国地区の3ヵ所の国立大学付属病院と1ヶ所の総合病院で自宅退院の許可のあった70歳以上の患者78名とした。

2. 調査方法および内容：自宅退院時に有している健康上及び日常生活上の問題を明らかにするために、①退院時の身体状態②日常生活について③退院時の患者の状況④家族の状況⑤健康に対する意識や取り組みの5部で構成した調査用紙を用いて、退院前の1週間から前日の時期に、30~40分間面接調査を行った。

3. 調査期間：平成5年7月~12月とした。

結 果

1. 対象者の特性

性別では男性37名、女性41名であり、年齢は70歳から90歳で、平均75.8(±4.9)歳であった。対象者の疾患は、全体の57.7%が悪性腫瘍疾患であり、消化器系疾患が最も多く78名中24名であった。

在院日数は、6日から246日で平均52.1日であった。退院後の住居は、全員住み慣れた所であった。入院中の主な治療は、手術療法が36名、保存療法が33名、その他8名であった。また、全体の48.7%は快方の転帰をとり、悪化した人は殆どいなかった。退院後の継続療法は、薬物療法が59名、食事療法30名、運動療法7名、その他6名であった。

2. 退院時の患者の身体状態

患者の身体状態についてやや問題ありも含め支障のあったものを図1に示している。精神状態、言語、理解力は、ほぼ10%以下でとくに問題はなく、問題ありとしたものは精神状態に軽度の痴呆が2名、理解力に理解が不可能が1名あった。20%以上問題があったものでは、聴力では難聴を訴えていた。視力に関する問題は多く、問題ありとした6名(7.7%)はメガネを使用しても見えにくいと訴えた。自覚症状を訴えた29名(37.2%)の主な症状は「痛み」であった。また、機能障害は

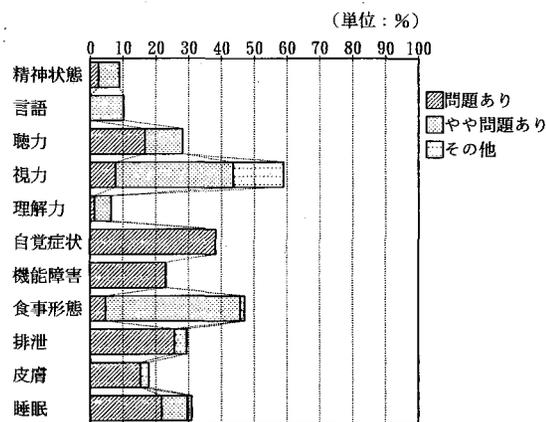


図1 患者の状態

18名(23.1%)の人にみられ疾患による麻痺・変形に起因する移動動作の困難が主な障害であった。食事形態での問題ありは、流動食、経管栄養でやや問題とした32名(41.0%)は軟食を食していた。また、塩分、カロリー、脂肪などの食事制限を必要とする人が14名(17.9%)みられた。排泄の問題では下痢、便秘の人が14名(17.9%)、失禁1名、ストーマ造設1名、カテーテル留置1名があった。睡眠は29.5%に問題があり、不眠17名(21.8

%)、早朝覚醒4名(5.1%)、昼夜逆転2名(2.6%)の訴えがあった。皮膚の問題は、22.8%と低かったものの、発疹・発赤、褥瘡、掻痒感等老人に特徴とするものがみられた。呼吸・循環については、ほぼ80%は訴えがなく、問題としては、労作時の息切れ、動悸・不整脈があった。以上の身体状態から継続看護が必要と思われる人は、23.1%あった。

3. 日常生活について

日常生活では、14名(18.0%)がサポーター、コルセット、杖、下肢装具、電動Bedなどの装具・自助具を使用していた(図2)。また、71.8%が義歯を用いていた。移動能力では図3に示すように、介助の必要な人は9名(11.5%)であった。その他の日常生活動作(ADL)に介助を必要とした人は、11名(14%)あり、更衣(2名)・食事(2名)・入浴(3名)・起居(1名)・排泄(1名)の動作に一部介助が必要であり、時間をかければできる4名、ほぼ全面介助2名であった。



図2 装具・自助具

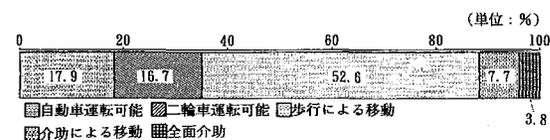


図3 移動能力

4. 退院時の患者の状況

退院後に外来通院が必要な人は91.0%であり、退院後の生活の自立について介助が必要と意識した人は、16名(20.5%)のみであった(図4)。一方条件によっては職業復帰もできると考えている人は9名(11.5%)あり、70歳から77歳の人であった。

退院時指導は61.5%の人が受けていたが、57.7%の人は心配事を持ち、病気のことが22名(28.2%)で最も多く、次いで食事のことが10名(12.8%)であった。その他、医療処置4名、運動3名、清潔2名であり、薬、睡眠、経済面、福祉、通院方法、社会復帰に関することについて各々1名ずつあった。また、心配事について44.9%の人は相談・指導を希望し、医師から受けた人が20名(25.6%)で最も多く、次いで看護婦が10名(12.8%)

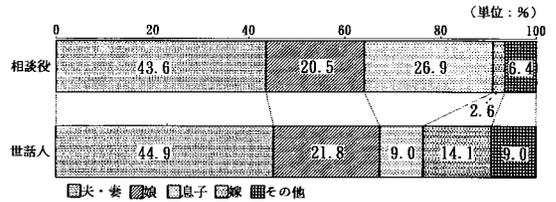


図6 相談役・世話人

6. 健康に対する意識や取り組み

対象者の57.7%はこれまで健康に恵まれていたと意識し、73.1%の人は健康を維持するために何らかの健康管理をしていた。生活信条においても50%の人は趣味や生きがいを持ち、25.6%の人はできる限り自立した生活をするを信条としていた。また、生活を豊かにするために一人平均2つ以上の趣味もしくは社会的役割を持ち、何もしていない人は5名(6.4%)にすぎず、意欲的な生活信条が伺われた。趣味では「テレビを見る・ラジオを聞く」「園芸」「運動」「書・美術」の順に多かった。生きがいについて、「かなりある」25名(32.1%)、「まあまあある」41名(52.6%)、「ない」と答えた人は2名(2.6%)であった。

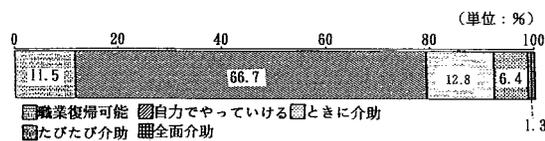


図4 生活の自立の意識

であった。その他、公的機関、地域の医療施設、栄養士、PT等がみられた。一方37.2%の人は、相談・指導の必要性を感じていなかった。また、機能障害や悪性腫瘍疾患と退院時の指導希望者との関係では、いずれも有意差はみられなかった。

5. 家族の状況

退院後の同居者は、図5に示すように一人暮らし又は老夫婦のみの核家族が51.3%であった。また、主たる相談役及び世話人は、図6に示すようにいずれも配偶者が半数であり、相談役では26.9%と、配偶者の次に高かった息子は世話人になると9.0%に減少し、その分嫁が増加していた。また、世話人の42.3%は職業を持ち、27.3%は健康を害していた。経済面では69.2%の人は独立し、経済面での問題のある人は1名のみであった。在宅サービスについて知っている人は35.9%で半数にも満たらなかった。

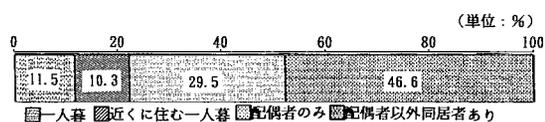


図5 家族形態

考 察

1. 健康上の問題

高齢者が自宅退院を迎える場合、家族の問題に合わせて基本的には患者の身体状態が問題となる¹⁾。健康障害により生じた身体的な変化は加齢に伴い改善されることは難しく、健康を維持する上で困難が予測される。今回の調査では、37%の人が痛みを主とする自覚症状を訴え、23%の人は疾患に伴う麻痺・変形による機能障害を持ちながら退院しているが、退院後これらの問題が自宅療養により改善される見込みは低いと思われる。また、特別に問題を自覚していない約60%の人についても、対象者の半数以上が悪性腫瘍疾患であることから退院後に新たな問題が出現することも予測される。感覚器では、主に視力と聴力に問題があり、周囲とのコミュニケーションや、指導上に

工夫が必要となる。食事では、食事制限や食事形態に問題があることから、食事療法の継続について指導が必要であると考えられる。排泄では30%の人に問題があり、ストーマ造設やカテーテル留置の状態での退院では、専門的な知識を必要とする為、継続看護が必要であると考えられる。高齢者の睡眠のとり方にはかなりの個人差があり、36%の不眠の経験者があったと報告されている²⁾が、今回の調査でも30%の人が睡眠に関して問題を持ち、主な訴えは不眠であった。また、早朝覚醒、昼夜逆転等何れも老人の特徴的な睡眠パターンであり、退院にあたっては睡眠のとり方の指導も必要と思われる。今回、身体状態から継続看護が必要であると判断した23.1%について、小島の調査結果では75歳以上の集団の12%の人に訪問看護の必要性が認められた³⁾のに対し、約2倍の患者に継続看護の必要性が認められたことになる。

2. 日常生活上の問題

ADLについては80~90%の人が自立できており、退院後の患者自身の自立への意識は高く、78%の人は自立できると考えている。70歳代の人では職業復帰も可能と考えている人も9名いたことなど退院後の生活を意欲的にイメージしていると思われる。しかし、全面介助の2名を含め介助の必要な14%の人の介助では、特に入浴、排泄等に介助の負担が大きいと思われる。また、ほぼ60%の人は退院後について心配事を持ち、50%は相談や指導を希望していたことがわかった。心配事の上位は、倉田らの報告による退院後自宅で療養する場合の気がかり⁴⁾と同様病気のことであったが、退院後一人暮らし若しくは老夫婦のみの核家族が半数以上であることから退院後の生活に不安を抱いていると思われる。経済的には殆どの人に問題はなかったが、介護者の4割は職業を持ち、3割は健康を害していたことや、介護に専念できる主な人は高齢の配偶者であることから、家族介護力は期待できない状況が伺われる。また、在宅サービスに関する知識も低く、一般に十分な浸透がなされていない点が問題である。退院指導についても、相談役として頼りにしている息子は実際の介

護になると嫁であり、家族背景により指導対象を考慮する必要があると思われる。焼山らは、高齢者の生活の自立や回復意欲を左右するものに生きがいがある⁵⁾と報告している。今回の調査から8割の人は生きがいを持ち、健康管理もなされ、自立した生活を信条としていることから意欲的に退院を迎えていると思われる。

結 論

高齢者の自宅退院時に持つ健康上及び日常生活上の問題を明らかにするために、面接調査を行なった結果以下のことが明らかになった。

1. 退院患者の23.1%は、身体状態より継続療法が必要であった。
2. 退院患者の20.5%は、退院後の生活を自立する為に介助が必要であるとしていた。
3. 退院患者の57.7%は心配事を持ち、50%は相談・指導を希望していた。
4. 患者の世話人の42.3%は職業を持ち、27.3%は健康を害していた。
5. 退院患者の73.1%は何らかの健康管理がなされ、84.7%は生きがいを持っていた。

本研究は平成5年度科学研究費の補助を受けて実施した研究の第1回目の報告であり、継続中である。なお、本稿の要旨は第25回日本看護学会、老人看護分科会において発表した。

文 献

- 1) 藤田和夫, 小船憲子, 菊地カナ, 木本友子: 老人入院患者の帰宅可能性の研究. 第20回日本看護学会集録(老人看護) 34-36, 1989.
- 2) 日野原重明編: 高齢者等の在宅療養支援のための調査・検討事業報告書. 7-20, 1991.
- 3) 日野原重明編: 高齢者の在宅療養支援のための調査・検討事業報告書. 32-42, 1991.
- 4) 倉田トシ子, 川上セツ子, 高橋美津子, 福田みどり: 退院後の生活に関する意識調査. 第20回日本看護学会集録(地域看護) 182-185, 1989.
- 5) 焼山和憲, 東郷美加子: 老人の回復意欲を左右する因子. 第22回日本看護学会集録(老人看護) 89-92, 1991.

Research of the problems on the elderly patients at discharge from the hospital concerning their health and daily life at home

Yoshiko NAKANISHI, Setuko TAKATA, Masuko KONDO, Niwa OTA,
Hikari INOSHITA, Toshiko IKEDA, Misako KOJIMA¹⁾

Abstract

Now there are few researches into the guidance which be done for the elderly patients at the time of leaving the hospital and into the ways of their home nursing care. Therefore, we did interview the elderly patients in order to make it clear what problems they have about their health and their life. In the three national university hospitals in Chugoku District and Shikoku District and one general hospital, we focussed on the 78 patients more than seventy years old who were allowed to leave the hospital.

The purpose of our research is to know body condition and the situation of the patients leaving the hospital, activities of their daily life, the situation of their family and their consciousness and care about their health. After having done this research we conclude as follows, (1) 23.1 percent of all the patients need continuing nursing care from the viewpoint of their body condition after leaving the hospital. (2) 20.5 percent of all the patients need help from their family or others to support themselves at home. (3) 57.7 percent of all the patients have worries and 50 percent of them have a wish to consult with the doctors or the nurses and to be guided by them. (4) 42.3 percent of people who take care of patients have their own job and suffer from poor health. (5) 73.1 percent of all the patients who leaves the hospital were given some health care before entering the hospital and 84.7 percent of them seem to lead a life worth living.

Key words : the aged people home nursing care. continuing nursing care,
consciousness about health, self-support for living

School of Health Sciences Okayama University

1) St. Luke's College of Nursing